

令和元年12月号(270号)
(皇紀2679年) 毎月1日発行

新風

編集人 瀬戸 開

発行人 魚谷 哲央
年間購読料 2,000円

維新改党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
<https://shimpu.jpn.org/>
otayori@shimpu.jpn.org

中国、一带一路の末路

小滝 透 (評論家)



「一带一路が中国を亡ぼす」(飛鳥新社、電子書籍)を上梓した。
中国を観察するにはさまざまある。経済でも政治でも権力闘争でも対米関係でも中国を観察する材料は数多い。では、なぜ一带一路を選んだのか。それは「国家はその置かれてある地理上の条件に最も拘束されるから」だ。それ故、私は国家の地理的条件にターゲットを当て、その未来を予測することにした。

さて、この一带一路の表現だが、その言葉は目新しくとも、歴史的には決して新しいものではない。陸のシルクロードでは、モンゴル(大元ウルス)がそれを完璧に実現してある。海のシルクロードに関しては大英帝国の海上制覇がそれに当たる。これから分かることは、国

の秋山真之が師事した人物だ。
アメリカは図体こそばかだが、典型的な海洋国家で、「それが生き延びるにはいかんすべきか」といふのがマハンの最大の課題だった。その中で、私が注目したのが「両生国家は存立しない」とのテーゼであった。つまり、大陸国家(ランド・パワー)と海洋国家(シー・パワー)は両立しないといふことだ。
モンゴルの例を見てみよう。

日本は、それこそ典型的な海洋国家としてあるが、それが日清戦争で韓半島に進出し、日露戦争で満州に進出し、つひには満州帝国を建国するに至つてある。この日露戦争勝利の直後、日本は帝国国防方針で、それまでの「海主陸従」

を止め、海陸両用の軍事方針を決めてある。つまりは、海洋国家の帝国日本が大陸国家にもなつてしまつたといふことだ。これは、韓半島が清や露国に奪取されれば、日本の後背に匕首を突き付けられるとの地理的条件が存在し、満州事変も張学良の日本権益への露骨な介入があつたためやむをえない仕儀であつたと思はれるが、その全ての成功(勝利)が逆に仇となつてある。それは、大陸まで伸び切つた日本の勢力範囲(地理的条件)を見てみれば、一目瞭然に理解できよう。

阿南のこの言葉に嘘はない。確かに百万の皇軍は健在だった。だが、問題なのはその百万が戦争の帰趨にまるで影響を与へてゐないことである。帝国日本の興廢は挙げて太平洋上の戦ひにあつた。そして、レイテ沖海戦で敗れた時点で帝国海軍は壊滅し、日本

の敗北はこの時決まつた。ちなみに、この決定的な日米戦を戦ふ前、日本はすでに大陸での戦ひ(日中戦)で非常な戦力を消耗してゐた。それがどれほど大きかつたかは、もし日中戦争が無かつたなら、単純計算百隻の空母を建造できたと言はれてゐる。
これでは勝てるわけではないのである。
ここまで来れば、両生国家がいかに困難なことか理解できよう。その両生国家に中国はならうとしてゐる。
この場合、新たに企図される海のシルクロードは、次の点で非常な障害に遭ふであらう。

これが、実にやつかないのだ。かの大英帝国からソビエトを経てアメリカに至るまで、イスラーム世界に関はつた帝国はどれもこれもが煮え湯を飲まされ続けてきた。とりわけ、アフガニスタンは問題だった。大英帝国は、ロシアとグレート・ゲームを行ふ中で、戦略的要衝たるアフガンを支配すべく三度にわたるアフガン戦争を実施した。だが、いづれも惨めに惨敗し、とりわけ第二次アフガン戦争では遠征軍が全滅の憂き目を見た。比喩で言つてゐるのではない。本当に全滅したのだ。

それはまづ、日米豪印が基軸となる「自由で開かれたインド太平洋戦略」に阻まれるはずである。おそらくこれが最も手ごわいものとならう。
次の障害は「真珠の首飾り作戦」と命名される飛び地經由の海上ルートだ。これは南シナ海を経て、インド洋を横切るわけだが、この地の地域大国たるインドがそれを唯々諾々と黙認することはないであらう。インド洋はその名の通りインドの内海となつてきたが、そこへ新参の中国が割り込もうとしてゐるのである。それを阻止する挙に出ること容易に推測できるであらう。
第三に、このシルクロードがイスラーム圏を横切ることだ。
これが、実にやつかないのだ。かの大英帝国からソビエトを経てアメリカに至るまで、イスラーム世界に関はつた帝国はどれもこれもが煮え湯を飲まされ続けてきた。とりわけ、アフガニスタンは問題だった。大英帝国は、ロシアとグレート・ゲームを行ふ中で、戦略的要衝たるアフガンを支配すべく三度にわたるアフガン戦争を実施した。だが、いづれも惨めに惨敗し、とりわけ第二次アフガン戦争では遠征軍が全滅の憂き目を見た。比喩で言つてゐるのではない。本当に全滅したのだ。

まだある。アフガンの西にはアメリカの仇敵イランが控へ、そのイランとサウジが互ひに反目し合つてをり、イエメンでは代理戦争を続けてゐる。さらに西のイラクでは戦争後の混乱が収まらず、鬼つ子たる「イスラーム国」さへ出現させ、シリアに至つてはいつ果てるともない内戦状態が続いてゐる。
イスラーム世界と拘はつた世界帝国はみなかうしたカオス(混沌)に足をすくはれてしまふのだ。そこへ中国は海のシルクロードに進出せんと企図してゐる。中国だけが例外となるとは考へられない。
中国の描く一带一路(海のシルクロード)の未来は限りなく暗いのである。

香港情勢が緊迫してゐる。香港市民の過半は学生青年の抗議・抵抗活動を支持してをり、香港政府といふよりも中共、習近平と厳しく対峙して中国人たる事を拒否して香港人としての独立意志を主張してゐる。しかし悩ましいのは、あと二十年ほどすれば完全に中共本土化が待つてをり、それまでに中共の独裁主義体制が崩壊しなければ完全に飲み込まれて仕舞ふのだ。▼日本の論壇では、米中経済対立が国家覇権対立にまで進みつつあり、中共の独裁体制の崩壊が間近との論評が多いが、果たしてさうであらうか。▼中国共産党が独裁体制を自己変革するにはあと二世代の時間を要するのではないのか。習近平世代は経済的に少々劣勢となつても強権で対応し得る鄧小平以降の国内的実績を有してをり(軍事力、経済力・技術力等々)、真にその限界性を意識する意識変革が新たな世代に芽生へるまでは期待できないのではないのか。従つて、国際社会も香港も圧力を加へつつそれまでの我慢比べであらう。▼安倍首相は、その中共政府の甘言・手練手管に簡単に乗せられて習近平を国賓として招待する愚を犯さうとしてゐる。かつての上皇陛下御訪中の誤りを再び行つてはならず、尖閣諸島への領海侵犯や靖国神社参拝などを棚上げしたままの愚策を強く糾弾しなければならぬ。(谷)

家が肥大化する、常に外へ膨張の兆しを見せることだ。
だが、これには幾つかの障害が立ちはだかる。それを見事に指摘したのがアメリカ最大の海洋戦略家であるアルフレッド・マハンである。

この敗北はこの時決まつた。ちなみに、この決定的な日米戦を戦ふ前、日本はすでに大陸での戦ひ(日中戦)で非常な戦力を消耗してゐた。それがどれほど大きかつたかは、もし日中戦争が無かつたなら、単純計算百隻の空母を建造できたと言はれてゐる。
これでは勝てるわけではないのである。
ここまで来れば、両生国家がいかに困難なことか理解できよう。その両生国家に中国はならうとしてゐる。
この場合、新たに企図される海のシルクロードは、次の点で非常な障害に遭ふであらう。

これが、実にやつかないのだ。かの大英帝国からソビエトを経てアメリカに至るまで、イスラーム世界に関はつた帝国はどれもこれもが煮え湯を飲まされ続けてきた。とりわけ、アフガニスタンは問題だった。大英帝国は、ロシアとグレート・ゲームを行ふ中で、戦略的要衝たるアフガンを支配すべく三度にわたるアフガン戦争を実施した。だが、いづれも惨めに惨敗し、とりわけ第二次アフガン戦争では遠征軍が全滅の憂き目を見た。比喩で言つてゐるのではない。本当に全滅したのだ。

まだある。アフガンの西にはアメリカの仇敵イランが控へ、そのイランとサウジが互ひに反目し合つてをり、イエメンでは代理戦争を続けてゐる。さらに西のイラクでは戦争後の混乱が収まらず、鬼つ子たる「イスラーム国」さへ出現させ、シリアに至つてはいつ果てるともない内戦状態が続いてゐる。
イスラーム世界と拘はつた世界帝国はみなかうしたカオス(混沌)に足をすくはれてしまふのだ。そこへ中国は海のシルクロードに進出せんと企図してゐる。中国だけが例外となるとは考へられない。
中国の描く一带一路(海のシルクロード)の未来は限りなく暗いのである。

まだある。アフガンの西にはアメリカの仇敵イランが控へ、そのイランとサウジが互ひに反目し合つてをり、イエメンでは代理戦争を続けてゐる。さらに西のイラクでは戦争後の混乱が収まらず、鬼つ子たる「イスラーム国」さへ出現させ、シリアに至つてはいつ果てるともない内戦状態が続いてゐる。
イスラーム世界と拘はつた世界帝国はみなかうしたカオス(混沌)に足をすくはれてしまふのだ。そこへ中国は海のシルクロードに進出せんと企図してゐる。中国だけが例外となるとは考へられない。
中国の描く一带一路(海のシルクロード)の未来は限りなく暗いのである。

新風驟雨

香港情勢が緊迫してゐる。香港市民の過半は学生青年の抗議・抵抗活動を支持してをり、香港政府といふよりも中共、習近平と厳しく対峙して中国人たる事を拒否して香港人としての独立意志を主張してゐる。しかし悩ましいのは、あと二十年ほどすれば完全に中共本土化が待つてをり、それまでに中共の独裁主義体制が崩壊しなければ完全に飲み込まれて仕舞ふのだ。▼日本の論壇では、米中経済対立が国家覇権対立にまで進みつつあり、中共の独裁体制の崩壊が間近との論評が多いが、果たしてさうであらうか。▼中国共産党が独裁体制を自己変革するにはあと二世代の時間を要するのではないのか。習近平世代は経済的に少々劣勢となつても強権で対応し得る鄧小平以降の国内的実績を有してをり(軍事力、経済力・技術力等々)、真にその限界性を意識する意識変革が新たな世代に芽生へるまでは期待できないのではないのか。従つて、国際社会も香港も圧力を加へつつそれまでの我慢比べであらう。▼安倍首相は、その中共政府の甘言・手練手管に簡単に乗せられて習近平を国賓として招待する愚を犯さうとしてゐる。かつての上皇陛下御訪中の誤りを再び行つてはならず、尖閣諸島への領海侵犯や靖国神社参拝などを棚上げしたままの愚策を強く糾弾しなければならぬ。(谷)

本紙目次
一頁：
●中国、一带一路の末路
二頁：
●維新改党・新風
令和元年党大会閉会 他